❒　複合施設の設置及び運営に関する懇談会
第２回 児童育成施設分科会　議事録要旨

日　時	平成 21 年 12 月 4 日（金）　19:00～21:00
場　所	荒川区役所 4 階 庁議室
出席者	〔委　員〕　阿久戸光晴分科会長、小林敦子副分科会長、 志村博司委員、竹内捷美委員、吉田詠子委員、斉藤邦子委員、 上田寛子委員、高田忠則委員、仲村　威委員、北川嘉昭委員、 高梨博和委員、友塚克美委員 〔オブザーバー参加〕　濱島計画課長、小泉児童青少年課長、 佐藤社会教育課長、鈴木指導室長 〔事務局〕　飯田特命担当課長、中野企画係長、谷井企画係主査、須田主事

1　［事務局説明］第１回のまとめ、配付資料の説明（子育て支援モニターアンケート集計結果の概要、体験機能の事例、地域資源を活用した事例、運営の仕組みの事例、中高生をターゲットにした展開の事例、個別事例）

2　委員から補足説明

(1) あじっぱについて（小林副分科会長から）

コンセプト　アジアの広場
（大宰府市（九州）にあり、アジアへとつながっているから）
九州国立博物館内のエントランスホールにある無料の施設。
各国ごとに 1～2m位のコーナーがあり、屋台を見て回るような楽しさがある。各国のおもちゃが置いてあり、親子で楽しめる施設になっている。

【ポイント】
・基本コンセプトがしっかりしている。
・大型設備がない。ソフトを重視している。
・アイディアは三木美裕氏（ボストンの子ども博物館のミュージアムエデュケーターという役割を担っていた方）によるもの。加えて学校の先生もソフト開発に協力している。
・ボランティアが多い。50～60 代、加えて大学生が博物館実習に来ている。

(2) 佐賀県小城市児童センターについて（志村委員から）
・議会で平成 18 年度に視察した。

・運営のソフト面が重要。
・広くないワンフロアの施設、天井を高くするなどの工夫はしている。
・所長が小学校元校長、臨床心理士等の資格も持っている。
・スタッフも教職免許などを持っており、勉強の指導なども行っている。
・児童運営委員 30 人。小学校 5 年生以下は児童サポーターに登録（130 人）。利用者が自分たちで運営するという姿勢が見られる。
・施設をどう運営していくか、ということが大事である。

3　［意見交換］

(1) 施設機能について

○　多額の税金を使う。長続きするものを作る必要がある。

○　荒川区らしさをどう生かすかがポイントになってくる。

○　膨大な資金をかけた施設は失敗している例が多い、むしろ、昔からの伝承遊び、世代間の交流、生きる力を育む、核家族であることから交流の場を提供するというところに意味があり、荒川区らしさがでてくるかもしれない。

○　文学館と図書館の連携を考える必要もある。他の区の施設と連携をとることも考えられる。

○　あらかわ遊園は、驚異的な生命力を持っている施設。入場料が安いということもあるが、自分で意味を見出し豊かな体験ができるから埼玉や千葉からも人が来る。北のあらかわ遊園、南の児童育成施設と位置づけることができれば、息長く続けられるのではないか。

○　基本的コンセプトを明確に。

○　施設全体の事務局イメージを示してほしい。

(2) 対象年齢について

○　０歳～小学校低学年の子どもたちが安心して遊べるところが望ましい。

○　下の年齢は未就学児まで、上は中学生くらいまで。地元地域とのつながりが強いのは中学生くらいまで。高校でいろんな地域に行くと、学校のある地域とのつながりが強くなる。

○　リーダー育成は中学まで。高校になっても地域が好きだという子は受け入れてもいい。

○　館がにぎわってきたときには、職員だけでは対応しきれないので、高校生のボランティアがくることで、小学生や中学生のリーダー（指導者）となってもらうのがいいのではないか。

○　館の対象は中学生まで。ボランティアとしては高校生以上も受け入れるという形がいいのではないか。

○　対象年齢　０歳～中高生。高校生をどこまでつかめるかという課題はある。

○　区の中でたった一つの施設になるということになると、いろいろな人に使っても

らいたいという思いはある。多目的が無目的になってはだめだが、欲張りたい。

○　平日と土日は分けて考えたほうがよいのではないか。日中と夜間では利用者が違ってくる。就学前ということになると一人では行動できないから、夜間帯は開いてしまうので対象者は欲張った方がいいと思う。

○　午前中は小さい子どもがメイン、また、学校教育との連携で使用することで、ものづくりを支える理科・科学について、学校教育でできないところをフォローする、夕方、中高生が使えるようにするなど時間で対象者を変えてみることも検討してはどうか。

○　中学生以下　　理科の実験をきてやれるようにすれば稼動率もあがるのでは。
専門的な人がきて実験するようなこともすればよいのではないか。
高校生　　ボランティア的な力を持つ。
クラブ（科学、美術）等に参加してもらい、その後、ボランティアとして参加してもらう仕組みを作ればよいのではないか。

(3) 事業内容について

○　子どもたちの集団の遊び、伝承遊びができるところがあると良い。

○　ボランティアの力が必要。小学生登下校時に子どもたちを見守る安全サポーターの方たちと子どもたちが、伝承の遊びができる場があったら、もっと交流できる。

○　伝承のおもちゃをただ置いているだけではだめ、人と交流しながら使うことで生きてくる。

○　町の歴史は小学校高学年から中学校くらいに興味をもつものだと思う。自分の父母の育ってきた時代がどうだったのか等を知り、近い体験をすることで親を身近に感じたりする。

○　中学生が顔をつき会わせて話すことが少ない。語り合う場所が必要。

○　来場させるには、どういう施設がいいのかを良く考えないといけない。
交通アクセス、興味をもってもらうために中の展示、照明を変えるなど、変化をもたせ来場させる仕組みを考える。

○　育児相談、難病相談等もやっているが、格式ばったところだと相談に来ない。このような場所での相談や指導も必要。

○　興味を持たせるためにイベントをやる。（けんだま選手権、書道展･･･等）注目させるイベントを。

○　母親をつかまえると子どもがくるので、母親をつかまえる方法を考える。

○　講演会等をやる。

○　ひろば館、ふれあい館で子どもたちが利用している施設があるが、幼稚園、小学生が中心で、中学生はボランティアとして参加している。

○　ボランティア、職業体験等、学習できる機能を有する事業やイベント等を行い学校では体験できないことを行えば、中学生も来るのではないか。

○　開設後につながる組織作り。

○　何かを作りつけで作ってしまうのはよくない。展示をつくるにしても稼動式がいいのかと思う。
○　ふれあい館にも調理室があるので、キッチンを作るなら子どもが使えるものがよい。
○　他施設にあるけど必要なものを考えたい。
○　パソコンはふれあい館にあるからいらない。
○　ふれあい館にある音楽室は、完全防音ではないので振動が伝わってしまう。検討必要。
○　子どもが楽しいものは親も楽しい。大人がまずやってみたいものをやれば賑わう。
○　食育。キッズキッチンは荒川にはない。幼稚園から食育を教えていきたいので、そのようなことを考えていきたい。
○　ふれあい館を 20 館つくるなかで、児童育成施設で何をするのか役割分担をよく検討しないと難しい。それを詰めていかないと対象を絞るのも難しい。ふれあい館と児童育成施設の相違点を示すことが必要。
○　ひろば館、ふれあい館、子育て支援センターの機能分化を明確に。
○　お金をかけなくても科学的なことはできるのでは。それを検討
○　運営経費について類似の施設の事例を示してほしい。
○　運営形態について整理する必要がある。

(4) プラネタリウム、科学分野について
○　プラネタリウム　年間経費 40 万くらいのもある。大型ではなくて、稼動式のものもある。プラネタリウム以外の用途で部屋を使うこともできる。
○　科学については、大型施設ではなく、単純な仕掛けでも子どもは喜ぶ。
○　プラネタリウムはなくなるのか。プラネタリウムはお金がかかる。
最近は画面で映し出すものがあるので、そういったものを導入したらどうか。

4　［事務局説明］今後の分科会について
12 月 24 日（木）　第３回分科会　（終日視察）
1　月 29 日（金）　第４回分科会　午後 7 時から　庁議室